

# 平成25年度弥富市小中学校適正規模に関するとりまとめ

平成26年3月

弥富市小中学校適正規模検討委員会

はじめに

「弥富小中学校適正規模検討委員会」が平成25年7月24日に組織され、次の事項が諮問されました。

- (1) 弥富市立小中学校適正規模に関する調査検討
  - ① 弥富市における小中学校の現状と課題
- (2) 弥富市立小中学校適正配置等に関する調査課題
  - ① 児童生徒の動向と通学区域の現状と課題

上記について、本委員会は、弥富市教育委員会から諮問を受け、直ちに第一回委員会を開催し、学校適正化について全市的に見据えた視点で調査検討を重ねてきました。全国的に少子化が進む中、児童生徒の動向に関する資料等の具体的調査や学校現場視察を実施してまいりました。

本市における教育行政の課題として、児童生徒の適正な教育環境の確保と少子化への対応は重要かつ緊急な事項である。

本委員会として、今年度の検討した意見を取りまとめました。

## 弥富市の教育をめぐる現状と課題

### (1) 学校規模・施設の現状と課題

当市には、8小学校と3中学校があり、現在過大規模校は無く、大規模校が弥生小学校の22クラス（普通20、特支2）、日の出小学校の21クラス（普通19、特支2）2校であり、適正規模校は桜小学校の14クラス（普通12、特支2）と白鳥小学校の15クラス（普通12、特支3）の2校である。

小規模校は、大藤、栄南、十四山西部小学校の3校が各校7クラス（普通6、特支1）、十四山東部小学校が8クラス（普通6、特支2）の4校で、過小規模校は、現在のところ無い。

中学校の過大規模校は無く、大規模校が弥富中学校の20クラス（普通18、特支2）で、適正規模校としては、弥富北中学校が17クラス（普通15、特支2）である。小規模校は、十四山中中学校が7クラス（普通6、特支1）である。過小規模校は、現在のところ無い。

施設建物に関しては、全体棟数の7割以上が建築後30年以上経過しているため、大規模改修が必要な建物が存在するが、構造材の耐震補強については、全て終わっている。

非構造材については、平成26年度、27年度で市内小中学校体育館の天井撤去を実施し、照明器具などの非構造材耐震補強を実施して行く予定である。

また、平成26年度に市内小中学校の構造体や建築部位の劣化状況を把握するとともに、各施設の維持管理上の課題を整理し、学校施設の整備計画（長寿命化計画）を策定することによって効率的・効果的な更新、改修、維持管理を行っていく。

今後、子供たちに安全・安心で快適な空間を確保するため、予防保全的な管理が必要である。

### (2) 児童生徒数の動向

平成25年5月1日現在の実数については、弥生小学校が642名で、桜小学校は、昨年分離して、406名である。日の出小学校については574名、大藤小学校は178名、栄南小学校は120名、白鳥小学校は328名、十四山東部小学校は168名、十四山西部小学校は138名、合計で2,554名である。

中学校は、弥富中学校が648名、弥富北中学校が487名、十四山中中学校が174名である。

小・中学校を合計すると、3,863名である。全国的な少子化の傾向もあり、当市の場合も減ってはいるが、減少率については周辺の市町に比べれば少ない。

## 小規模校のメリット

### 【学習面】

- ・教師が生徒一人一人の特性を把握し、きめ細かな学習指導、生活指導ができる。
- ・学校生活への参加意識が高くなり、互いに教え合う機会がふえる。

### 【生活面】

- ・教職員と生徒の親密な関係を築きやすい。
- ・生徒の個々の特性を理解しやすく、人間関係が深まりやすい。

### 【学校運営面・財政面】

- ・教職員が生徒の個性や課題について、共通理解を図りながら学校運営ができやすい。

### 【その他】

- ・学校と地域が連携した活動を行いやすい。

## 小規模校のデメリット

### 【学習面】

- ・生徒同士で高め合おう、学び合おうとする気持ちが薄れやすい。
- ・集団生活の機会が少なく、社会性の醸成が図りにくい。
- ・生徒同士の評価が固定化されやすく、学習意欲や競争心に問題が生じやすい。
- ・教職員数が限られるため、専門教科職員が不足になりやすい。
- ・教職員1人当たりの校務分掌の負担が大きくなる。
- ・教師に依存する傾向が強くなりやすく、自立心や社会性が育ちにくい。

### 【生活面】

- ・クラス替えなどがなくなり、人間関係が固定化されやすい。
- ・少人数のためリーダーが得られにくく、リーダーが固定化されやすい傾向がある。

### 【学校運営面・財政面】

- ・出張、研修等に参加しにくい。
- ・運営費、人件費等の経費が非効率的になりやすい。
- ・特定の教職員に校務分掌が集中しやすい。

### 【その他】

- ・PTA活動等において、保護者一人の負担が大きくなりやすい。

## 大規模校のメリット

### 【学習面】

- ・集団の中で、多様な考え方に触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて、一人ひとりの資質や能力をさらに伸ばしやすい。
- ・学習活動や学校行事、クラブ活動等において集団教育活動に活気が生じやすい。
- ・児童・生徒数、教員数が多いため、グループ学習や習熟度別学習など、多様な学習・指導形態を取りやすい。
- ・様々な種類の部活動等の設置が可能となり、選択の幅が広がりやすい。

### 【生活面】

- ・クラス替えがしやすくなり、人間関係や集団の形成が図りやすくなる。
- ・多くの友達と学習し生活する中で、社会性や協調性が形成されやすくなる。

### 【学校運営面・財政面】

- ・教員数が多いため、様々な教育活動でバランスのとれた教職員配置を行いやすい。
- ・学年別や教科別の教職員同士で、学習・生徒指導等についての相談・研究・協力等が行いやすい。
- ・出張、研修等に参加しやすい。
- ・子ども一人あたりにかかる経費が小さくなりやすい。
- ・校務分掌を組織的に行える。

### 【その他】

- ・PTA活動等において、役割分担により、保護者の負担を分散しやすい。

## 大規模校のデメリット

### 【学習面】

- ・教職員による各児童・生徒一人ひとりの把握が難しくなりやすい。
- ・学校行事や部活動等において、児童・生徒一人ひとりの個別の活動機会を設定しにくい。

### 【生活面】

- ・学年内・異学年間の交流が不十分になりやすい。
- ・教職員による各児童・生徒一人ひとりの把握が難しくなりやすい。

### 【学校運営面・財政面】

- ・教職員相互の連絡調整が不十分になりやすい。
- ・特別教室や体育館等の施設・設備の利用の面から、学校活動に一定の制約が生じる場合がある。

### 【その他】

- ・保護者や地域社会との連携が難しくなりやすい。

## とりまとめ（25年度）

弥富市立小学校における小規模効果の教育環境を考慮すると、大規模校に比べて、子供と先生との距離が近く、個々に対応したきめ細やかな教育ができ、学校行事や部活動等において、児童一人ひとりの活動機会を設定しやすくなる。

また、クラス替えがないので、互いの関係を深めて学級づくりがしやすかったり、異学年間の縦の交流が生まれやすい。ただ、小規模校の場合、人間関係の問題があった場合クラス替えができなかったり、行事を行うときに人数が少ないため運営が難しいことがある。

通学距離に関しては、栄南小学校の駒野地区が市内で最も遠く、3.5キロを約55分かけて通学をしている。それは集合場所からの時間であるため、実際はもう少し時間をかけて通学している。

国は、基本4キロ以内と目安を示しているが、安全上限界といえる。

よって、通学距離を考えた場合、小規模校同士の統廃合は極めて困難といえる。

次に学校区に関して見直しをする場合、現在地域の行事や子供会の活動など小学校区と密接なつながりがあり、これを変えようとした場合、地域住民や保護者の理解を得るのが難しい。

中学校の場合、少人数となると学級のルールや生徒の中の価値観が固定化されがちになり、多様なものの見方、考え方を学んだり、そこから生徒自らが新しいルールや学級文化、人間関係を作り上げようとする機会が少なくなるため、生徒に自主性・主体性や社会性などが育ちにくい面がある。

また、教職員数が少ないため、経験、教科、特性などの面でバランスのとれた配置が行いにくい。そして部活動において、指導する教師、参加する生徒の数が少なくなるため、制限されることがある。

市内には過大規模校はないが、規模が大きくなりすぎると一概には言えないが、正常に学校経営ができなく、教育困難になる傾向にある。

現在、弥富中学校が大規模校に該当するが、これ以上過大になっていくことを防ぐ方策をとる必要があると考えられる。

その方策としては、中学校の通学区域を変更することによって適正規模の確保に努める。

そして、財政上の問題を考慮しなければ、中学校を新設することによって、適切な対応を行う。

今後中学校の規模をどのようにしていくかということが大きな問題になってくると考えられる。

## 今後の検討課題

今回、学校の適正規模に関しては、「学習面」、「生活面」、「学校運営面・財政面」、「その他」の4点から検討を行い、その結果、中学校を過少規模または、過大規模にすることは望ましくないという結論付けを行いました。

このことにより、中学校の通学区域を見直すことによって再編成をする方策が提案されました。

そのためには、現在の学校名にとらわれない形での中学校の新設も視野に入れて、生徒の教育環境に格差が生じないように、また、学校と地域との関係を考慮して、保護者や地域住民の理解を得て、合意形成に努めることが重要であると考えます。

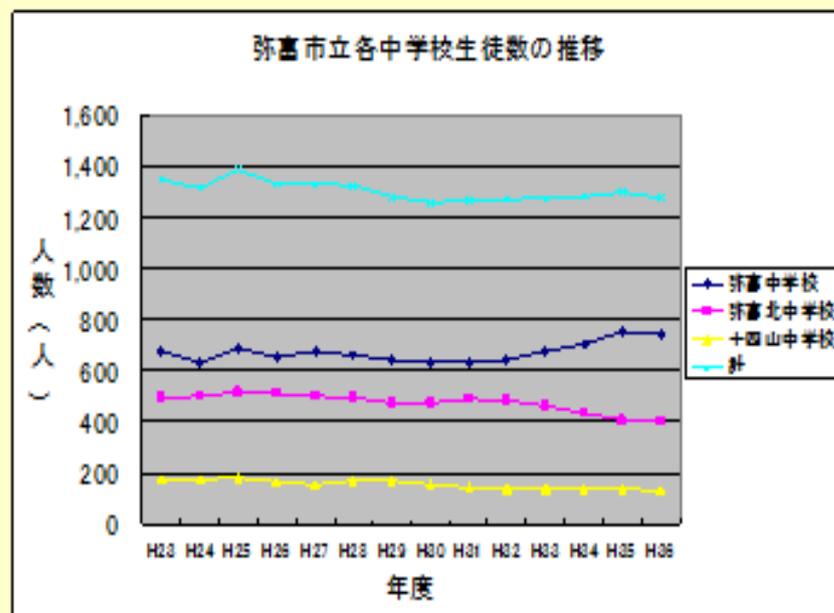
参考資料

# 市内の小中学校区



# 市内の中学校の 生徒数の将来推移

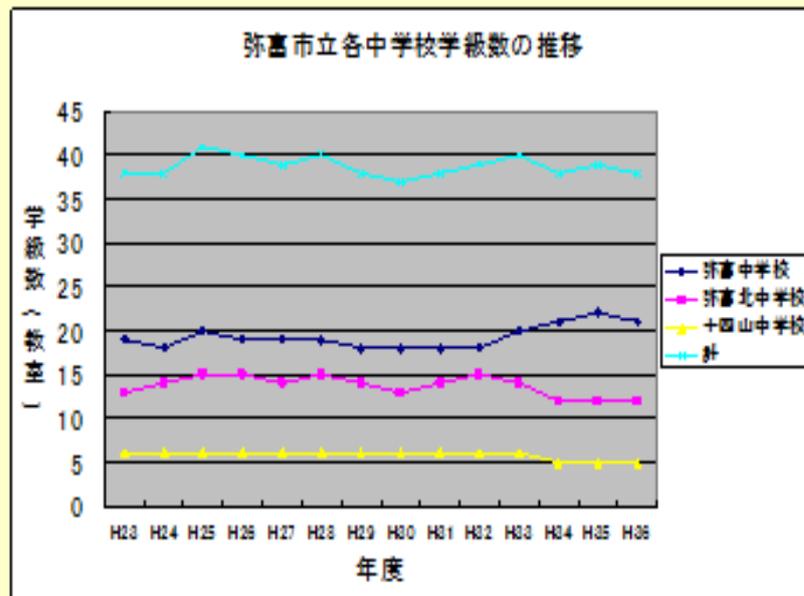
## 弥富市立中学校の現況と将来生徒数の推移



## 弥富市立中学校の現況と将来生徒数の推移

中学校名	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	H32	H33	H34	H35	H36
弥富 中学校	676	632	688	653	678	659	641	630	634	646	679	706	751	745
弥富北 中学校	495	502	515	513	500	495	474	475	487	484	461	433	407	403
十四山 中学校	178	178	182	164	155	170	168	154	144	140	136	140	140	130
<b>計</b>	<b>1,349</b>	<b>1,312</b>	1,385	1,330	1,333	1,324	1,283	1,259	1,265	1,270	1,276	1,279	1,288	1,278
	H23.5.1現在	H24.4.1現在	H25以降は、H24.4.1現在の住民基本台帳・外国人登録台帳の人数											

# 市内の中学校の 学級数の将来推移



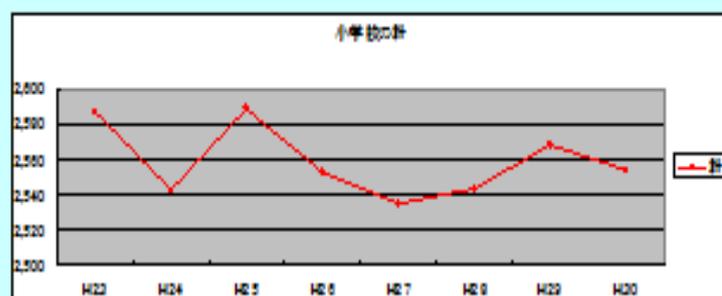
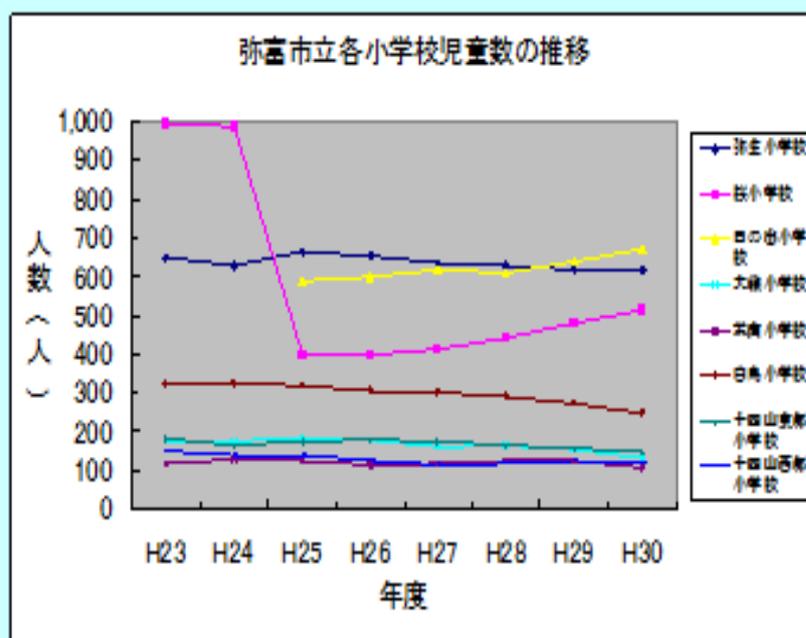
※特別支援学級数は、含んでいません。

弥富市立中学校の学級数の推移 ※特別支援学級数は、含んでいません。

中学校名	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	H32	H33	H34	H35	H36
弥富 中学校	19	18	20	19	19	19	18	18	18	18	20	21	22	21
弥富 北中学校	13	14	15	15	14	15	14	13	14	15	14	12	12	12
十四山 中学校	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	5	5	5
計	38	38	41	40	39	40	38	37	38	39	40	38	39	38
	H23. 5. 1 現在	H24. 4. 1 現在	H25以降は、H24. 4. 1現在の住民基本台帳・外国人登録台帳の人数から学級数を算定											

# 市内の小学校の 児童数の将来推移

## 弥富市立小学校の現況と将来児童数の推移

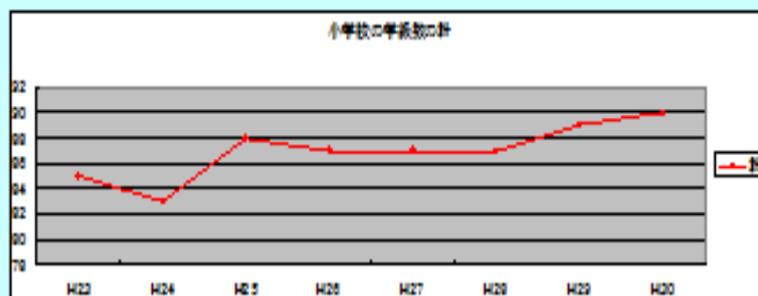
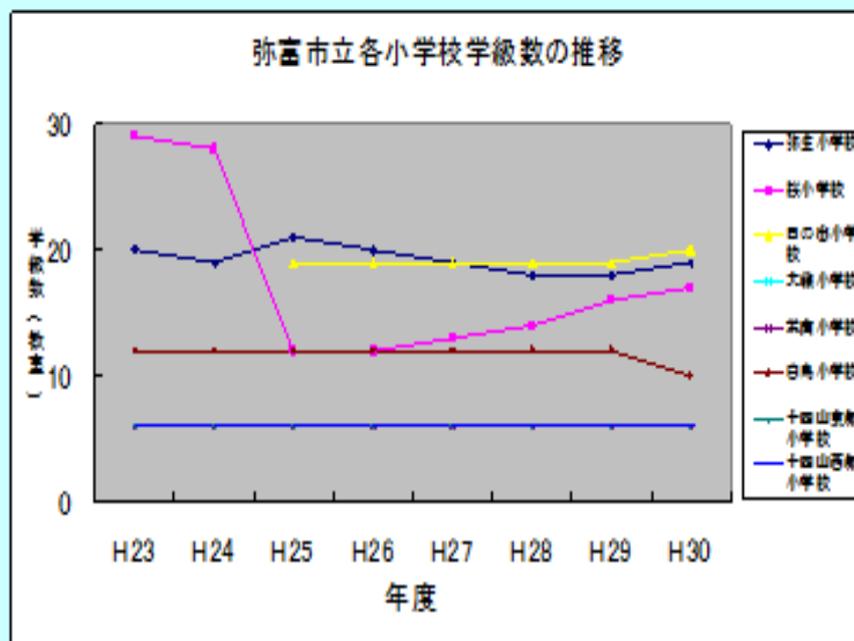


## 弥富市立小学校の現況と将来児童数の推移

小学校名	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30
弥生小学校	649	627	663	653	635	629	618	616
桜小学校	993	985	398	398	413	440	481	513
日の出小学校			587	597	617	610	637	671
大藤小学校	174	174	183	178	161	164	155	132
栄南小学校	119	130	125	114	118	126	124	108
白鳥小学校	321	324	319	305	301	291	273	248
十四山東部 小学校	182	164	176	181	175	166	156	148
十四山西部 小学校	149	139	138	127	115	118	124	118
計	2,587	2,543	2,589	2,553	2,535	2,544	2,568	2,554
	H23.5.1現在	H24.4.1現在	H25以降は、H24. 4. 1現在の住民基本台帳・外国人登録台帳の人数					

# 市内の小学校の 学級数の将来推移

弥富市立小学校の学級数の推移 ※特別支援学級数は、含んでいません。



弥富市立小学校の学級数の推移 ※特別支援学級数は、含んでいません。

小学校名	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30
弥生小学校	20	19	21	20	19	18	18	19
桜小学校	29	28	12	12	13	14	16	17
日の出小学校			19	19	19	19	19	20
大藤小学校	6	6	6	6	6	6	6	6
栄南小学校	6	6	6	6	6	6	6	6
白鳥小学校	12	12	12	12	12	12	12	10
十四山東部 小学校	6	6	6	6	6	6	6	6
十四山西部 小学校	6	6	6	6	6	6	6	6
計	85	83	88	87	87	87	89	90
	H23. 5. 1現在	H24. 4. 1現在	H25以降は、H24. 4. 1現在の住民基本台帳・外国人登録台帳の人数から学級数を算定					

# 各中学校の部活動の状況

平成23年度中学校課外活動状況		平成23年7月1日現在				
		(単位：人)				
課外活動の名称	別区中学校	別区北中学校	十国山中学校	計		
1 ソフトテニス(男)	40			40		
ソフトテニス(女)	45	27		72		
2 野球	39	22	27	88		
バレー(男)	24	43	24	91		
バレー(女)	21	27	20	68		
3 サッカー	42	52		94		
4 ソフトボール	24	20	20	64		
バスケットボール(男)	29	25	26	80		
バスケットボール(女)	22	21		43		
5 卓球(男)	24	41		65		
卓球(女)	28	25	21	74		
6 ハンドボール(男)	46	22		68		
ハンドボール(女)	26	27		53		
7 剣道(男)	24			24		
剣道(女)	20			20		
8 相撲(男)	22	20		42		
相撲(女)	10			10		
9 空道(男)	24			24		
空道(女)	1			1		
10 弓道(男)	1			1		
弓道(女)	20	26		46		
小計	565	82.6%	429	89.2%	1,698	94.6%
11 吹奏楽(男)	0		29	29		
吹奏楽(女)	57			57		
12 合唱団(男)	15			15		
合唱団(女)	12		10	22		
13 美術(男)	2			2		
美術(女)	22	14		36		
小計	111	16.6%	52	10.8%	163	17.4%
合計	676	100.0%	481	100.0%	1,861	100.0%
		別区中学校	別区北中学校	十国山中学校		
体育系クラブ数	12	10	5			
文化系クラブ数	3	2	1			

**小中学校の適正な規模とは？**

## 文部科学省の定める小中学校 の適正な学校規模の基準

学校教育法施行規則第41条及び第79条

小中学校の学級数は、**12学級以上18学級以下を標準**とする。ただし、**地域の実情その他により特別の事情のあるときは、この限りでない。**

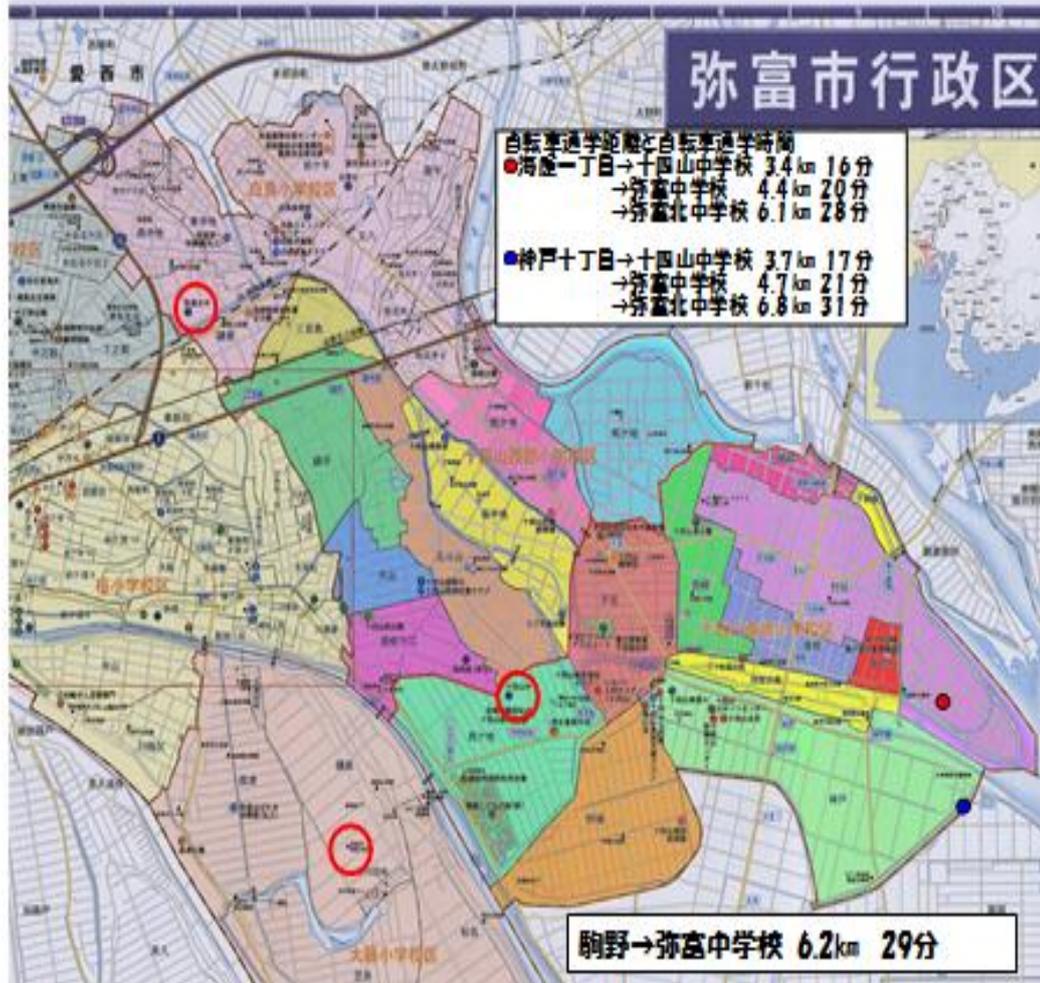
## 全国と愛知県の公立中学校の学校規模の実態

上段愛知県414校

H23.5.1現在 下段全国9,915校

学校規模	学級数	学校数(校)	割合
過大規模校	31学級以上	(7) 25	(1.7%) 0.3%
大規模校	19~30学級	(146) 1,495	(35.3%) 15.1%
適正規模校	12~18学級	(154) 3,136	(37.2%) 31.6%
小規模校	6~11学級	(85) 3,075	(20.5%) 31.0%
過小規模校	5学級以下	(22) 2,184	(5.3%) 22.0%

# 自転車通学距離と 自転車通学時間



## 全国と愛知県の公立小学校の学校規模の実態

上段愛知県976校

H23.5.1現在 下段全国21,180校

学校規模	学級数	学校数(校)	割合
過大規模校	31学級以上	(21)	(2.2%)
		362	1.7%
大規模校	19~30学級	(337)	(34.5%)
		4,560	21.5%
適正規模校	12~18学級	(370)	(37.9%)
		6,205	29.3%
小規模校	6~11学級	(220)	(22.5%)
		7,359	34.8%
過小規模校	5学級以下	(28)	(2.9%)
		2,694	12.7%